

== 起立工商会社 ==

起立工商会社（きりつこうしょうかいしゃ）明治初頭、日本の美術品、物産品を初めて世界へ輸出した貿易会社の礎。

1873年（明治6年）明治政府が総力を結集し日本の物産品を集め、オーストリアの[[ウィーン万国博覧会]]へ出展、大勢の外国人が関心を寄せ、日本の会場は連日賑わい、おおいに日本の国力を世界にしらしめた。

[[ウィーン万国博覧会]]終了後、好評を博した日本庭園を、イギリスのアレキサンドル・パーク社が買い取りたいと申し出て、博覧会事務局に商品の保証を求めてきた。しかし、政府として参加しているため、博覧会事務局は関与できず、団長であり副総裁であった伯爵・[[佐野常民]]の指名で、当時、海外へ[[佐賀県]]の[[嬉野茶]]を輸出し、大きな実績を残していた[[松尾儀助]]を社長に、道具商として参加しており、美術、工芸の知識も深かった[[若井兼三郎]]を副社長に任命。急遽、半官半民の貿易会社、起立工商会社を設立し、日本庭園の販売に至った。後ほど博覧会で売れ残った品々も売買し、これにより日本で初の貿易会社となる。

翌年の1874年（明治7年）政府に全権を託された[[松尾儀助]]と[[若井兼三郎]]は銀座・竹川町16番地（現・銀座7丁目）に事務所を開設。以後、木挽町に第一製造所、築地2丁目本願寺裏に第二製造所を建設し美術工芸品を製造する。

最盛期には80余名の社員と、日本全国から様々な職種の精鋭をあつめ、100名以上の技工を雇用し、その製作品は世界で行われた万国博に出品され、多くの金賞を獲得、日本の技術を世界にとどろかせ、後に国へ多大な国益をもたらすこととなる。

1876年（明治9年）にはアメリカ建国100年を記念して開催された、[[フィアデルフィア万国博覧会]]に起立工商会社として初参加する。

この万博への参加は会社の命運を賭けた一世一代の大勝負であった。9人もの大人数での出張となったのだが、顔ぶれは[[松尾儀助]]、[[若井兼三郎]]、[[西尾喜三郎]]、[[原口太助]]、[[八戸欽三郎]]などであった。佐賀出身であった八戸は、米国イエール大学卒業の才人で、英語が達者であったため通訳を一任されていた。そのほか、茶商1人と醤油の亀甲萬（キッコーマン）の主人、[[永岡善八]]が社員とともに渡米した。この時、[[松尾儀助]]は[[香蘭社]]製の[[有田焼]]に特に力を入れ、当時の[[香蘭社]]の[[深川栄三衛門]]らを応援し、以後、エキゾチックな異国趣味の陶磁器はアメリカ人の心をつかみ巨額な外貨を稼ぐこととなる。

博覧会と時を同じくして東洋美術の殿堂と称される[[ボストン美術館]]も開館している。当

時の美術館関係者は、「博覧会はコレクションを増やす絶好の機会であり、アメリカ芸術の著しい進歩に繋がることがわかるだろう」と期待を表明、後に[[ボストン美術館]]の日本美術部長となる[[アーネスト・フランシスコ・フェノロサ]]は「日本の展示は驚きの宝庫」と評している。

万博で行われる起立工商会社の展示品は、当時の宮内省が認定した[[帝室技芸員]]（現在でいう人間国宝）が選定しており、他の出展グループとは扱う品が異なり、例外なく超一流のものばかりだった。

博覧会の効果もあり、アメリカでの需要を確信した社長の松尾儀助は、日本への帰国途中にニューヨークへ立ち寄り、ブロードウェイ456番地に賃料年間3000ドルの店舗物件を仮契約し帰国する。

帰国後すぐに同じ佐賀県出身で、旧知であった時の総裁、[[大隈重信]]を訪ね、日本の国力を伸ばすため、さらなる世界進出を直訴すると、松尾の商才に一目おいていた[[大隈重信]]はただちに[[松尾儀助]]の要望を受け入れ、その年に[[八戸欽三郎]]を支店長に据えニューヨーク支店の開店となる。

ニューヨーク支店では、[[八戸欽三郎]]、[[高柳陶造]]、[[原口太助]]、[[西尾喜三郎]]、[[小森徳之]]など日本人10名、時に米国人を2～15人ほど雇用し、日本の織物、蒔絵、漆器、陶磁器、絹、木綿製品、銅器などの工芸品を扱った。

1880年に卸部門が発足、[[執行弘道]]が主任として雇われ、翌年[[八戸欽三郎]]が急死すると[[執行弘道]]は支店長に任命された。執行は佐賀藩出身で、大学南校（東大の前身）で学び、アメリカ留学の後、外務省に勤務し中国へ渡り、三井物産香港支店の支店長を経て、起立工商会社に起用された。

この時代、起立工商会社は異国情緒溢れ、日本の商品を直接買える店として、ニューヨークでは大変目立つ存在でになり、社名は**The First Japanese Manufacturing and Trading Company**を主として使い、現在でもその名は欧米ではよく知られている。

ニューヨーク支店の開設については後に[[大隈重信]]が「紐育（ニューヨーク）日本人発展史」の序の中で、「[[松尾儀助]]氏が起立工商会社を起こして日米貿易の礎を築き・・・」と記しており、日米間の貿易の画期をなす快挙であった。

その後、ニューヨークの成功に自信を得た[[松尾儀助]]は1878年（明治11年）の[[パリ万国博覧会]]の開催と合わせて、キャプシーヌ通りにパリ支店を開店。初代支店長にはパリ万博で審査官を務め、フランス留学経験のある佐賀出身の[[大塚琢造]]を据え、通訳にはフランス語に有能で、[[帝国大学]]を優秀な成績で卒業した[[林忠正]]を起用した。アメリカと同様にフランスでも[[ジャポニスム]]（日本趣味）が一世を風靡し、審美眼の高いフラン

ス人は陶器、扇子、櫛、簪に至るまで様々な商品を買求め、パリ支店も盛況となる。日本の絵画も扱っており、次第に[[浮世絵]]も日本通の間で人気が出始め、[[浮世絵]]は当時の印象派に多大な影響を与えた。

当時無名だった[[ポスト印象派]]の[[フィンセント・ファン・ゴッホ]]も起立工商会社に来店し、[[バルセロナ万国博覧会]]と[[パリ万国博覧会]]のため準備に渡欧していた[[松尾儀助]]から起立工商会社と墨書きされた[[嬉野茶]]の茶箱のプレートを譲り受け、それをキャンバスに「Still Life With Three Books」と「Small Basket with Flower Bulbs」の二枚の油彩画を描いている。(現在、アムステルダムの[[ゴッホ美術館]]所蔵)

1888年(明治21年) [[バルセロナ万国博覧会]]にも参加し、起立工商会社は出品委託引受先となっていた。また翌年の1889年(明治22年)の[[パリ万国博覧会]]にも参加し、この時代、万博といえば起立工商会社と称されていた。

各国の万博参加やニューヨーク支店も2つに増えるなど表向きは好調にみえたが、1881年(明治14年)の政変後は、急激な円高となり貿易には不利な状況となっていた。加えて、製造所も運営し、良質なもののづくりを社訓としていたため、人件費や原料代がかさみ、経営が切迫していく。

規模の縮小、経費削減を図るが、1884年(明治17年)横浜で円中商店を設立した円中孫平にパリ支店を譲渡する。

パリ支店の譲渡により経営も一時は安定を取り戻すが、やはり資金がたりずニューヨーク支店も機能不全に陥った。

1890年(明治23年)にはニューヨーク支店も譲渡し、翌年の1891年(明治24年)起立工商会社は解散を迎える。17年という短命な貿易会社だったが、明治初頭多大な国益をもたらし、日本の美術工芸品の発展に貢献し、[[山中商会]]を始めとする後の貿易会社の礎となった。

1911年には、西洋における東洋美術コレクションの中でも傑出して重要とされる「[[法華堂根本曼荼羅図]]」をボストン美術館に寄贈している。

社長であった[[松尾儀助]]の没後は、[[真葛焼]](横浜焼)の名匠であり起立工商会社に勤めていた[[宮川香山]]([[帝室技芸員]])や[[林忠正]]ら日本美術協会のメンバーが、[[松尾儀助]]の製作から貿易までの日本美術への貢献は多大であり、勲章授与に値するとして、明治政府に掛け合った。この働きにより明治政府は[[松尾儀助]]に勲4等を授け従5位に叙した。

== 参照文献 ==

田中政治「続・商人ものがたり 風雲児・松尾儀助」公開経営指導協会 1997年2月号
～11月号

田川永吉「マンハッタン一番乗り ニューヨーク生活のバイブル」2009年

田川永吉「政商 松尾儀助伝 海を渡った幕末・明治の男達」文芸社 2009年

田川永吉「女丈夫 大浦慶伝 慶と横浜、慶と軍艦高雄丸」文芸社 2010年

朽木ゆり子「ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商」新潮社 2011年

東京国立博物館/名古屋ボストン美術館/九州国立博物館/大阪市立美術館/ボストン美術館
/NHK/NHKプロモーション「ボストン美術館 日本美術の至宝」図録

NHK NHKプロモーション 2012年